

館様から借用した雑誌『文芸倶楽部』二点(いずれも雪子の素顔を紐解きました。雪子の存在が信綱の活動にどのような影響を与えたのか、今回の展示によってその一端が明らかになりました。



館様から借用した雑誌『文芸倶楽部』二点(いずれも雪子の素顔を紐解きました。雪子の存在が信綱の活動にどのような影響を与えたのか、今回の展示によってその一端が明らかになりました。

平成二十七年特別展報告

十一月六日(金)から十二月十三日(日)まで、特別展「信綱と雪子—二人三脚の文筆活動—」を開催しました。

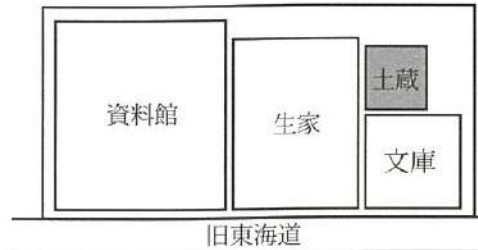
長年にわたって信綱を支え続けた妻・雪子にスポットを当て、夫婦二人三脚の活動の軌跡を描き出しました。雪子の内助を讃える声は決して少なくないものの、立場上大きく取り上げられることがなかったその働きぶりに初めて焦点を当てた展示となりました。

展示室では、記念館に伝わる資料—書簡、肖像画、原稿など—のほか、神奈川近代文学

佐佐木信綱 記念館だより 第30号

目次

- ・平成二十七年特別展報告
- ・講演会
- ・佐佐木幸綱氏講演「信綱の人と仕事」
- ・新資料の紹介
- ・展示情報
- ・土蔵のリニューアルにむけて



旧東海道 記念館配置図



土蔵(改修前)

記念館敷地内に建つ土蔵の改修工事が、平成二十七年十二月より始まりました。土蔵は、主屋とともに宿場町の趣を残す建造物で、平成二十三年十月二十八日には国の登録有形文化財にも登録されています。佐々木家石薬師時代には書庫として活用されており、信綱少年は父に叱られるとよくこの蔵に閉じ込められたそうです。ある日あまりにも物音がしないため心配した母が中を覗くと、そこには一心に本を読みふける信綱少年の姿があったといわれています。

これまで一般非公開とされてきた土蔵ですが、改修後は休憩スペースとして開放させていただきます。土蔵内にはデジタルフォトフレームを設置し、「文化の薫る歴史街道活性化事業」内の企画「私のおすすめ ずさか百景」に応募していただいた写真を紹介します。より多くの方に利用いただけるよう、施設の充実を図ってまいります。

土蔵のリニューアルにむけて



平成27年度特別展「信綱と雪子—二人三脚の文筆活動—」図録。編集・発行は鈴鹿市文化課。記念館にて無料配布中。なくなり次第配布終了。



雪子が信綱に送った恋文。信綱を「兄さま」と呼び慕っている。



晩年、書齋に亡き妻の肖像を掲げ仕事に励んだ信綱。

展示内容を解説した図録は、来館された多くの方から好評をいただきました。開催期間中は千名を超える方々にお越しいただき、記念館は大いに賑わいました。ご協力をいただきました皆様、誠にありがとうございました。

販売物のご案内



『佐佐木信綱とふるさと鈴鹿』
発行：鈴鹿市教育委員会
¥1,000



『加越日記』
著者：佐々木弘綱
発行：竹柏会出版部
¥1,200

※販売物の一部です。詳しくは佐佐木信綱顕彰会HPをご覧ください。

佐佐木信綱記念館

鈴鹿市石薬師町1707-3 TEL&FAX 059-374-3140

開館時間 9:00~16:30 休館日 毎週月曜日・第3火曜(休日の場合は翌日休館)

発行・編集

鈴鹿市 文化振興部 文化課

鈴鹿市神戸一丁目 18-18 TEL 059-382-9031 FAX 059-382-9071

講演会

特別展の開催に伴い、十一月七日(土)午後一時三十分より、鈴鹿市・佐佐木信綱顕彰会共催で講演会を開催しました。



利玄について語る久留原氏

久留原昌宏氏による講演で、約五十名の方にお越しいただきました。
久留原氏には「木下利玄・人と作品」と題し、竹柏会門下の逸材として名高い木下利玄の人となりとその作品の魅力についてご講演をいただきました。利玄は信綱門弟としてはやや毛色の異なる人物ですが、信綱を歌の師として仰ぎ終生慕ったことなど、信綱・利玄師弟の強い絆を伝えていただく貴重な機会となりました。



講演会の様子

はじめ遠方からも多くの方にお越しいただき、講演会は盛況のうちに終了しました。

昨年十一月二十七日(金)午後三時より、文化会館さつきプラザにおいて文化講演会を開催しました。「信綱の人と仕事」と題しご講演いただいたのは信綱の令孫であり歌人・国文学者の佐佐木幸綱氏です。信綱顕彰会が毎年開催する歌会では、選者としても馴染みの方です。
講演では、信綱の遺した功績や作品、その人柄についてお話しただきました。ご子孫ならではの視点から語られる信綱の姿に、参加された方々は興味深く聞き入っていました。当日は地元市民をはじめ、講演会は盛況のうちに終了しま

佐佐木幸綱氏講演「信綱の人と仕事」

信綱一首 30

人いづら吾がかげ一つのこりをりこの山峡の秋かぜの家

雪子への挽歌二十六首からなる「秋風の家」より。昭和二十三年作。妻に先立たれた孤独を万葉調で詠い上げる。

新資料の紹介

今年度も皆様のご厚意により資料数点をご寄贈いただいております。その中から、一点の資料を写真とともに紹介いたします。

■佐佐木信綱・熊澤一衛 画讃幅



月台主戯画
〔杜若の絵〕
の花
池の辺
の
なして
友と
ゆく春を
山はやかた
ともにみる
信綱



全体図

信綱と熊澤一衛による画讃幅です。一衛が描いた杜若の絵の横に、信綱の歌が書き添えられています。



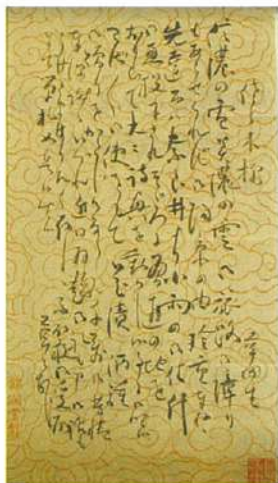
熊澤一衛

一衛は四日市を代表する実業家で、大正から昭和にかけて活躍した人物です。関東大震災の影響で「校本万葉集」の校正刷りが焼失、刊行の危機に瀕した際、信綱のもとを訪ね援助を申し出たのが大正十二年のことでした。以来、信綱とは生涯にわたる親交を結びました。

展示情報

展示室左手において、「文豪との交流」と題したミニコーナーを設けています。森鷗外や芥川龍之介など、近代文学を代表する作家達とも交わりがあった信綱。そうした人物に関連する書簡など計六点の内から、ここでは二点を紹介します。文豪達の筆致をご堪能ください。

■展示物一例

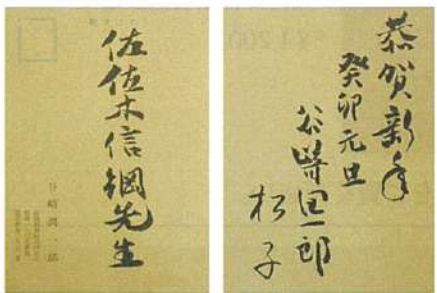


信綱宛 幸田露伴書簡



信綱宛 幸田露伴書簡

本名(成行)で送られた手紙。信濃・美濃の旅から帰った信綱を労う言葉から始まり、土産を買ったことへの礼を述べ結びとしている。二人は古くからの知友であり、明治33年に行われた竹柏会大会では、露伴は信綱からの講演依頼を快諾している。昭和12年にはともに文化勲章を受章するなど縁深い人物であった。



信綱宛 谷崎潤一郎葉書

松子夫人との連名による年賀状。差出人住所は「熱海市伊豆山」とあるが、谷崎がここに居を構えたのは昭和29年のこと。葉書に切手の貼付がないことから、本人もしくはその使いから直接受け取ったものと考えられる。同時期に同市の別荘で暮らしていた信綱との交流の証である。